

coffee time 川に船を並べ、その上に板を渡しして橋とすること。五月雨の頃も近し。水の心測り難として、有るつる岸を猶広う堀りなして、向より此方に殊更に高う茅場口(かやばぐち)と云ふ事して、一丈余にや茅よ柴よと重上(かさねあ)けて築ふ(つきた)つ。縦漕出(た)といみなぎ(り)いづとも斯(かく)く広うしつれば、常より殊に水の勢はとどめてん。さて常陸上毛(ひたちこうづけ)のあたりより高瀬と云へる三十尋(ひろ)ばかりなる舟、六、七十艘さし上(のぼ)せて、横様(よこさま)にひしひしと浮並べたるが上に、厚さ三尺余ばかりの広き板どもを、路は人間ばかりに敷渡したり。先(まず)其下(した)にしろと云ふ事をよく平にして、彼の板をば敷並たりとぞ。此板の本と末とは、さながら現(あらわ)に見せて、二本ばかりが程を、此方より向の方まで緑の芝を植続け、青き太き竹もて勾欄(おぼしま)をしたり。其間一間に二本づつ小松を植ぬ。芝の上勾欄の本に添いて、太き松皮(ひはだ)の縄の上を蔽(いかめ)しき竹の實(さく)して包みて、同じく向まで引きはへぬ。…又芋綱(おづな)の彼の松皮の綱よりは半ばかり細き鉄(くろがね)の碇を付けて干筋(ちすじ)沈めたり。さるは舟とも軸(へさき)まで引きはへつゝ末は水に投入ぬ。猶此河の上一里余を過ぎて碇縄の末に、各々綱を添へて漂漕(みおつくし)など様に、杭打並べ引止めつるとなん。さて彼の橋板には新なる筵(むしろ)を敷渡して土を浅う置きて夫(それ)が上には、清き砂散きたるを箆して掃ひれば、殊に清まはりて見ゆ」

「此橋は此正月の頃より四月(うづき)の初(はじめ)つ方(かた)まで、数多の村里より人夫を出して、黄金二万ばかりをもて成出でける」(道芝の記)

3ヶ月もかけ「選御の後やがて取毀(とりこぼ)ちて、尋常(よのさね)の船渡となせる。元よりの御定なりとなん」將軍の日光社参のための船橋であった。

「宿の光三、三侯堤の上に鎮蔵一ヶ所あり、これ先年日光御参詣のとき船橋をかけられし料也と云。鎮蔵八十式筋を収蔵せり」(日光道中略記) 三侯は、八坂神社の裏の堤をいう。もちろん今は鎮蔵はない。

「当宿の儀は中田宿と合宿に有レ之、毎月十五日代り相勤来る」(日光・奥州・甲州道中宿村大概帳) これは人馬の継立てを交替でしたことを意味する。

16 栗橋関所
「房川戸御関所、女江戸より出るに手形上がる、下りいらす。男上下いらす」(五海道中細見独案内)

「御関所 利根川堤の上にあり、その置し年代さだかならず。見張の番所をかまへて往來の旅人を改む。是を房川渡(ぼうせんわたし) 中田御関所と唱ふ…」(日光道中略記)

駅通志稿によると元和2年(1616) 栗橋宿設置と同年の八月、関東十六津をみだりに渡ることを禁じた旨があり、その一つに房川が挙げられている。初めは渡船場を取締っていたらしい。実際の設置は寛永元年(1624)で、「寛永元年より今の加藤奎兵衛、足立十右衛門、富田定右衛門、島田源治郎の先祖御抱(おつかえ)となり、世々栗橋宿の西に在住してかはるかはる番をつとむ」(日光道中略記)

関所は堤上にあり、旅人はこの関所を通ると河原に下って渡し船で利根川を中田宿へと渡った。利根川の堤は洪水で切れ、被害は宿駅にも及び、関所もたびたび改築された。碑の文字は第16代徳川家達の筆による。



静御前の墓

11 静御前の墓
源義経の内妻であった静御前の墓と伝えられている。静御前は、義経を追って奥州に向かう途中、義経の死を知り、文治5年(1189)9月15日、ここで亡くなったと言われている。ここには高柳寺(こうりゅうじ)と呼ばれる寺があったので、静御前は寺の境内に埋葬され、墓上には杉の木が植えられた。高柳寺はその後、中田(現在の茨城県古河市)に移転し、光了寺と名を改めている。

「墓のしるしとして高さ五丈余、圍は式丈尺余、枝のひらき拾五間半なる杉の大木たり」(日光道中略記) 「其(杉の大木)下(した)に一言の宮とて小さきこらあり。…今年(享和3年1803)五月関東の郡代中川飛騨守、貨を損て其事を石に勒(ろく)して樹下に立となり」(日光駅程見聞雜記)

静御前の墓が残され、墓に墓標がなかったのを享和3年(1803)に勘定奉行・関東郡代の中川飛騨守忠英が「静女之墳」を建立した。墓上の杉の木は弘化3年(1846)の洪水により枯れ、その後銀杏が植えられた。

12 福寿院
「新義真言宗、下総国葛飾郡元栗橋村真相院、長栄寺号、本尊不動、開山俊盛清保四年(1647)四月二十日寂す。」(新編武蔵風土記稿) 境内には天神社、三峰社、不動堂、観音堂がある。

旅籠屋「会津屋五右衛門」「仙台屋」「秋田屋」などがあった。

お食事処すえひろ



福寿院

15 八坂神社
「牛頭天王社 村の鎮守なり」(日光道中略記) また、道の右手に馬頭観音堂があったが今はない。栗橋町発祥の頃よりの村社。江戸末期に作られた御神輿は、大きさや作り方において、関東三大神輿の一つに数えられている。狛犬の代わりに鯉の彫刻がある。

14 栗橋関所番士屋敷跡
栗橋関所に勤務した番士の住まい。番士屋敷としての存続期間は、関所が置かれたとされる寛永元年(1624)から明治2年(1869)に廃止されるまでの約240年間に及ぶ。番士の屋敷は4軒あり、高い盛り土の上に建物が建てられていた。この地域は利根川に面しており、何度も洪水の被害を受けた。番士屋敷も洪水のたびに盛り土を高くして建て直し、現在の姿になっている。現在はスーパー堤防を造っているため総て破壊されている。

10 栗橋関所址
栗橋関所跡

栗橋中央1

栗橋中央2

栗橋中央3

栗橋中央4

栗橋中央5

栗橋中央6

栗橋中央7

栗橋中央8

栗橋中央9

栗橋中央10

栗橋中央11

栗橋中央12

栗橋中央13

栗橋中央14

栗橋中央15

栗橋中央16

栗橋中央17

栗橋中央18

栗橋中央19

栗橋中央20

栗橋中央21

栗橋中央22

栗橋中央23

栗橋中央24

栗橋中央25

栗橋中央26

栗橋中央27

栗橋中央28

栗橋中央29

栗橋中央30

栗橋中央31

栗橋中央32

栗橋中央33

栗橋中央34

栗橋中央35

栗橋中央36

栗橋中央37

栗橋中央38

栗橋中央39

栗橋中央40

栗橋中央41

栗橋中央42

栗橋中央43

栗橋中央44

栗橋中央45

栗橋中央46

栗橋中央47

栗橋中央48

栗橋中央49

栗橋中央50

栗橋中央51

栗橋中央52

栗橋中央53

栗橋中央54

栗橋中央55

栗橋中央56

栗橋中央57

栗橋中央58

栗橋中央59

栗橋中央60

栗橋中央61

栗橋中央62

栗橋中央63

栗橋中央64

栗橋中央65

栗橋中央66

栗橋中央67

栗橋中央68

栗橋中央69

栗橋中央70

栗橋中央71

栗橋中央72

栗橋中央73

栗橋中央74

栗橋中央75

栗橋中央76

栗橋中央77

栗橋中央78

栗橋中央79

栗橋中央80

栗橋中央81

栗橋中央82

栗橋中央83

栗橋中央84

栗橋中央85

栗橋中央86

栗橋中央87

栗橋中央88

栗橋中央89

栗橋中央90

栗橋中央91

栗橋中央92

栗橋中央93

栗橋中央94

栗橋中央95

栗橋中央96

栗橋中央97

栗橋中央98

栗橋中央99

栗橋中央100

13 池田本陣跡
池田鴨之助(鴨助)は、新編武蔵風土記稿によれば、並木五良平と共に、幕府に願ひ出て、慶長年間(1596~1614)に、下総国の栗橋村(現茨城県猿島郡五霞町元栗橋)より村民を引連れ、後の栗橋宿となる上河辺新田を開墾しました。また、深廣寺の開基となり、山内の「六角名号塔」の建立に協力し、明暦元年(1655)11月18日に没しました。法名を「梅院院光盛」といいます。並木家の初代五郎平は、幸手城が関宿城の小笠原氏に攻め落とされた時、身を隠していた幸手城主一色直朝の子輝季を当地「萬屋(並木家)」にて捕まえたという逸話があります。また、その後子孫は宿名主を務めました。また、あるとき大洪水による飢えから人々を救おうとして、御用米を村民に分け与え、その罰により所払いをうけて小右衛門に移り住んだといわれています。(久喜市ホームページより)

14 栗橋一里塚
栗橋一里塚は推定で表示。小右衛門一里塚と中田一里塚の中間点を栗橋一里塚と推定。所在の手掛かりが不足。ご存じの方はご連絡下さい。JZE00512@nifty.ne.jpまで

9 並木五郎平(五郎兵衛)墓
新編武蔵風土記稿によれば、池田鴨之助と共に、幕府に願ひ出て、慶長年間(1596~1614)に、下総国の栗橋村(現茨城県猿島郡五霞町元栗橋)より村民を引連れ、後の栗橋宿となる上河辺新田を開墾しました。また、深廣寺の開基となり、山内の「六角名号塔」の建立に協力し、明暦元年(1655)11月18日に没しました。法名を「梅院院光盛」といいます。並木家の初代五郎平は、幸手城が関宿城の小笠原氏に攻め落とされた時、身を隠していた幸手城主一色直朝の子輝季を当地「萬屋(並木家)」にて捕まえたという逸話があります。また、その後子孫は宿名主を務めました。また、あるとき大洪水による飢えから人々を救おうとして、御用米を村民に分け与え、その罰により所払いをうけて小右衛門に移り住んだといわれています。(久喜市ホームページより)

8 深廣寺
久喜市指定文化財の六角名号塔がある。南無阿彌陀仏の文字が六面に刻まれ、全部で21基ある。1基の高さは3m60cmで、承応元年(1657)に建立された。「是は承応2年(1653)当寺第二世単信、伊豆の大鳴より大石二十一を舟に載(のせ)り来りし時、海上にて舟すゝまず海鰐(うみねずみ)のこふるならんとて石一つを水中に投じ、残る二十本をせ来りて建立せり。後明和年中(1764~72)に至り、時の住僧精拳満山、その志をつぎて一基をたて、単信が鳳志を満足せりといふ」(いまでも左端の一基に単信と、満山の名が彫つてある。)



深廣寺六角名号塔



14 栗橋一里塚
栗橋一里塚は推定で表示。小右衛門一里塚と中田一里塚の中間点を栗橋一里塚と推定。所在の手掛かりが不足。ご存じの方はご連絡下さい。JZE00512@nifty.ne.jpまで

6 浄信寺
「本尊聖観音は慈覚大師の作なり。此像は鮭延越前守が守護仏なりしを、鮭延家下総古河に御つけになり、家断絶のとき家臣の竜宮宮内、同兵五郎等相謀りて当寺に寄納せり」(日光道中略記)

7 梅澤太郎右衛門の墓
元和8年(1622)4月、徳川2代將軍秀忠の日光東照宮社参のとき、暴風雨のため利根川が満水となり、將軍の渡る船橋が危なくなつた。太郎右衛門は人夫を率いて水中に入り、命がけでこの橋を守り、災難を救った。秀忠はこれを賞して、関東郡代伊奈宗十郎忠治を通じて貞宗の刀刀・金地に日の丸の軍扇及びお墨付きを与え、名字帯刀を許されたという。



浄信寺

17 利根川
「宇房川有り。幅大概式百拾四間、常水川幅四拾間程。船渡なり。此川水元は西之方は鳥川・蕪川・神流川より流れ、北之方は思川・巴波川・佐野川・渡良瀬川より流れ、流末は下総国佐原より津之宮海江落る。此川一鉢利根川なれ共、此所にては房川といふ」

関所を通って船渡場に出ると「宿内船渡場脇馬船水主のもの相勤候小屋ヶ所、茶船水主之者相詰候小屋ヶ所有レ之。水主・船頭夫々割合相勤候得共、重き通行之節は一同罷出相勤來」この馬船というのは馬四頭を乗せられる船、茶船は十石積の荷物運送の川船。運賃は「水丈八、九尺程有レ之節を常水と極、往來船は武家之外旅人老人に付賃銀五文、茶船は老人に付拾五文、荷物は老駄に付式人分の賃銀取レ之。凡水丈尺増に付、人馬、荷物とも五文宛増銀可レ請取之事」(日光・奥州・甲州道中宿村大概帳) 寛政3年(1791)のお達し。

4 池田鴨之助の墓(顕正寺)
池田鴨之助(鴨助)は、新編武蔵風土記稿によれば、並木五良平と共に、幕府に願ひ出て、慶長年間(1596~1614)に、下総国の栗橋村(現茨城県猿島郡五霞町元栗橋)より村民を引連れ、後の栗橋宿となる上河辺新田を開墾しました。鴨之介は慶安元年(1648)12月9日に没し、法名を「光明院釈常薫」といいます。池田家は、江戸時代初代鴨之助の子、奥四右衛門よりその名を世襲し、代々栗橋宿の本陣役を務めました。

3 常薫寺
「法華宗、下総国中山法華経寺末、高林山梅香院と云、本尊三宝祖師を安ず、傍に毘沙門の像を置、是は武田信玄の守護仏なりと云ふ。当寺に納めし由未詳ならず、開山常修院日常正安元年(1299)三月二十日寂、中興開基は今の名主の先祖池田鴨之助、法名光明院常薫と云、慶安元年(1648)十二月十九日死す、法名を寺号にせしものなり、是寺往古庵室にてありしことは、既に利根川渡船場の條に出せり」(新編武蔵風土記稿) 「日蓮宗、下総国法華経寺の末、高林山梅香院と号す」(日光道中略記) 炮烙地蔵が以前あった。スーパー堤防を造るため取り壊された

2 炮烙地蔵
関所を通らないで渡つた者、あるいは、渡ろうとくわで渡つ前に発見された者は、関所破りの重罪人として火あぶりの刑に処せられた。もとは常薫寺にあったが、処刑場のあった現在の場所にかわつたという。堂の中には数枚の炮烙が祀られている。また、エゴ地蔵ともいわれ、あげた線香の灰をエゴにかけると治るといふ。

2 炮烙地蔵
関所を通らないで渡つた者、あるいは、渡ろうとくわで渡つ前に発見された者は、関所破りの重罪人として火あぶりの刑に処せられた。もとは常薫寺にあったが、処刑場のあった現在の場所にかわつたという。堂の中には数枚の炮烙が祀られている。また、エゴ地蔵ともいわれ、あげた線香の灰をエゴにかけると治るといふ。

炮烙(ほうろく)
中国の伝來的な刑罰の1つである。猛火の上に多量の油を塗った銅製の丸太を渡し、その熱された丸太のうえを罪人に裸足で渡らせ、渡りきれば免罪、釈放するというものである。「史記」によれば、暴君であったとされる殷最後の君主帝辛(紂王)と、その愛妾妲己が処刑を見世物として楽しむために考案したという。罪人は焼けた丸太を必死の形相で渡るが、油で滑って転落しそうになる。丸太にしがみつき、熱くてたまらず、ついには耐え切れずに猛火へ落ちて焼け死んでしまう。この様子を観ながら紂王は妲己と抱き合いながら笑ひ転げたという。西伯昌(文王)が廃止を懇願し、帝辛に領地を差し出してようやく廃止させたといふ。炮烙の刑には上記に述べた物以外にも、銅製の円柱に罪人を縛りつけ、その円柱を業火で熱して罪人を焼き殺すという方法も伝わっている。



会津見送り稲荷

31 栗橋宿 ~ 中田宿
埼玉県久喜市栗橋町
川通神社 ~ 利根川橋
(歩行距離 1944m 24分)
歩く地図でたどる日光街道
http://nikko-kaido.jp/
JZE00512@nifty.ne.jp



顕正寺

5 顕正寺
「浄土真宗、京都東本願寺末、幡谷山破邪院と云、此寺は常陸国幡谷城主、幡谷次郎左衛門尉信勝剃髮して円空と号し、同所光念寺と云天台宗の寺に住す、其頃親観上人同国福田にあり、円空夢の告によりて上人をたづねゆき、円空の唯信と改め、幡谷にかへり光念寺を一向宗の道場とす、其後兵火にかゝりて衰微せり、然るに下総國中田新宿村藤の森と云所に、聖徳太子の刻める阿彌陀を安置する堂あり、靈験あらたなれども、させる堂宇のいなみもなければ、則光念寺をこゝに移し、幡谷山破邪院顕正寺と号し、その阿彌陀を本尊とす、然るに当村名主先祖池田鴨之助、信仰のあまり当所へ引移せりと云、されども下総國中田にも今其旧跡に顕正寺とて、わつかの庵室のこれり、唯信坊は弘安二年(1279)三月十一日寂す、中興開山利円寛永十九年(1642)二月十八日寂、其後古河城松平周防守、石州浜田へ國替えのとき、時の住僧帰依により石州へつれゆき一寺を建立し、是を顕正寺と称と云、」(新編武蔵風土記稿)



会津見送り稲荷

1 会津見送り稲荷
「栗橋の手前に栗餅の名物あり」(日光駅程見聞雜記) 「名物あわもちや吉右衛門」(五海道中細見独案内)とあり、この粟もち屋の子孫、柿沼氏。昔はほかに8軒くらいあったという。「あは餅を売る茶屋川崎や長右衛門方休み、暖簾には梅鉢の紋の印(しるし)を染めたり。栗餅一盆(数十)とりて風味を致せば黒砂糖にてわるく甘し。昔は一盆十五文、今は百文なり」(上野下野道の記)

「いにしへ津屋の飛脚、このころにて盗賊にあひしとき、稲荷の冥助を以て其難を免かれしかば、社を造立して神徳にむくへり」(日光道中略記)

江戸時代、会津藩主の参勤交代による江戸参向に先立ち、藩士が江戸へ書面を届けるためにこの街道を先遣隊として、栗橋宿下河原まで来ると地水のために通行できず、街道がわからなくなった。困っていると突然、白髪の老人が現われ、道案内をしてくれ、そのお陰で藩士は無事に江戸へ着き、大役を果たした。また、道が通行できず、茶店でお茶をご馳走になっている時に、大事な物を忘れてきたことに気づき、そのため死を患い止らせた。後になってこの老人は狐の化身と分かり、稲荷様として祀った。狐に乗る茶吉尼天を祭神とした珍しい稲荷社



会津見送り稲荷